

将来社会における社寺の可能性

—京都龍岸寺と東近江正福寺の取り組みを中心に—

成安造形大学准教授／成安造形大学附属近江学研究所研究員・副所長

加藤
賢治

将来社会における社寺の可能性 ―京都龍岸寺と東近江正福寺の取り組みを中心に―

成安造形大学准教授／成安造形大学附属近江学研究所研究員・副所長 加藤 賢治

Name:

Kenji KATOH

Title:

A consideration of the role of temples and shrines in society in the future, with a focus on Ryugan-ji Temple in Kyoto City and Shopuku-ji Temple in Higashi-Omi City

Summary:

Aging and population decline are serious problems facing many areas in Japan. What roles do temples and shrines play in places such as these? This report attempts to answer that question by examining a number of examples of the future roles of temples and shrines in such areas.

はじめに

現在、日本における寺院の数は七六、九三〇カ寺^(一)で、近年よく比較されるが全国のコンビニエンスストアの総数五五、六七七店舗^(二)よりかなり多い数に驚かされる。ちなみに、神社の数は八一、〇七四社^(三)に上り、寺院の数よりも多いという。全国の中学校の数が概ね一万校といわれていることから、平均すると一中学校区にコンビニエンスストアが五店舗、寺院が七カ寺、神社が八社あると捉えて良いであろう。

この数字が何を意味するかということを考えねばならない。現代社会においてコンビニエンスストアの機能は、飲食物や雑貨、日用品の販売などにとどまらず、ATMの利用や、宅配便の取り扱い、公共料金の支払い、そして近年では住民票の写しや印鑑証明などの各種公的証明書の発行まで可能な店舗も加わり多様化。日常生活に無くてはならない存在となつて、現在も進化している。

一方で、寺院や神社の機能はというと、コンビニエンスストアとは比べものにならないと言わざるをえない。そのような現状の中で数の上で圧倒的に多い社寺をなんとか有効に利用する手段は無いのかという議論が起こつて久しい。

ただ、各地に散在する社寺が、何もしないかというところではなく、近年地域の核として取り組みが様々なかたちで行われているのも事実である。そしてもちろんではあるが、社寺の機能としては、数値に置き換えることができない「心の拠り所（信仰）」という大切な役割も備えている。

本論考では、活発な動きを見せる一部の寺院に注目してその取り組みを紹介し、将来社会に息づく社寺の姿とはどのようなものかということについて考えてみたい。

第一章 京都龍岸寺^{りゅうがん}の歴史と取り組み ―

(一) 龍岸寺の歴史

JR京都駅から中央改札口を出て西に向かって徒歩一〇分ほどのところに、浄土宗龍岸寺がある。^(四)

龍岸寺の寺史によると、安井算哲（一世算哲）（二五九〇～一六四七）によつて元和二年（一六一六）に創建されたといわれ、その長子である洪川春海（二世算哲）（一六三九～一七一五）は、貞享の改暦に尽力し、幕府の天文方に任ぜられたことで知られる。龍岸寺の門前の通りは現在「三哲通り」と呼ばれているが、それは算哲の名から名付けられたという。

開基である一世算哲は、僧侶としては無名である

が、囲碁に秀でており、十一歳の時に徳川家康に謁見を許され、十九歳から毎年、家康の囲碁の相手を務めた。そして、六十三歳でこの世を去るが、その後、子の二世算哲は保井算哲、渋川算哲、渋川春海と改名し、父親の後を継いで万治二年（一六五九）に幕府に御城碁として初出仕した。二世算哲は幼少期から天文学に興味を持っており、江戸で算学や暦学を、京都では陰陽頭であった土御門家と親交を深め、これまで、誤差が多くあった中国の暦から日本独自の暦である貞享暦の採用に尽力した偉人であり、幕府から正式に天文方として採用されている。

江戸時代に活躍した優れた学者を輩出した家系が創始した龍岸寺。その伝統を今に受け継ぐ住職が池口龍法氏（一九八〇〜）である。池口氏は、兵庫県尼崎市の浄土宗寺院の出身で、京都大学でインド及びチベットの仏教学を学んだ後、二〇〇五年から知恩院に奉職、現在も編集主幹として務められている。二〇一四年から、龍岸寺の住職となり、多岐にわたる活動が始まった。

（二）池口氏の取り組み「フリースタイルな僧侶たちのフリーマガジンの発刊」

池口氏が浄土宗総本山の知恩院に奉職されて少し経った頃、二〇〇九年八月に『フリースタイルな僧侶たち』というフリーマガジンが発刊された。フリーマガジンなので、無料で誰でもが手にとって読むことができる。これを編集したのが、池口氏である。

このようなフリーマガジンを編集しようと思った

きっかけは、仏教がオウム真理教などの新興宗教の印象と重なり、仏教寺院や僧侶たちが何をやっているのか、ある種の誤解もあり、正確に理解してもらえないという背景があった。また、当時はSNS（Social Network System）のような手軽に自分の行動を発信することができなかったこともあり、フリーマガジンを通して、寺院や僧侶が取り組んでいる最新の情報を発信することになったという。

一般の読者も、次代の仏教界を担う若手の僧侶たちも、このマガジンを読むことで現代社会におけるお寺の役割を考えるきっかけとなった。現在では、二〇一九年八月に創刊十周年を迎え五五号が発刊された。この記念号は池口氏から始まって、三代目の編集長が担当した。現在五六号を数えるこのマガジンは「経典をナナムから読む会」というイベントを開き、仏教は失恋に効くのかという議論や、日常の中で修行を体験するイベント「ブッダニア」の開催など、様々な取り組みにつながり、それらを発信し、そしてイベント参加者を増やしていった。

歌を歌う、芝居をする、ダンスをする、楽器を弾く、漫画を描くなど、若手の僧侶たちが自分の得意とする能力を使って、仏教を少しでも暮らしの中に入れて込んでいくことを続けてきた。

十年にわたってのフリーマガジンによる寺院と僧侶の活動報告は、マスコミを通じて様々なかたちで京都を中心としながら全国に発信され、ある程度寺院の今までに見られなかった前衛的な活動が珍しくないところになんてなってきたように感じると池口氏

は実感している。そして、池口氏自身の活動も当然その紙面を豊かなものにしていくのである。

（三）龍岸寺の取り組み「てら*ぱるむすの活動前夜」

浄土宗龍岸寺住職の池口氏は「お寺には日本文化の精神が詰まっている」という。

お寺では建築にしても、家具や仏具でも、修理しようと思うと必ず伝統工芸を受け継ぐその道の職人さんに頼らなければならない。それは言い換えれば、お寺の内部は、数百年前の伝統を何らかのかたちで受け継いできたもので溢れているということである。本堂にあるものは、金箔、漆工、金工、彫刻など、少し視線を動かせば必ず何かを見ることができ。また、庫裡の座敷では、現代の一戸建て住宅やマンションの一室に見られなくなった床間や違い棚、掛け軸や扁額、香炉、生花などが日常的にその場に存在する。いわゆる室町時代以降の日本文化そのものがお寺には詰まっているのである。

そして、お茶や和菓子などがちよつとしたお休み時間に出されるなどすると、目で見ると、手に持つと触れる以外に、美味しい香りを楽しむ、味わうということまで体験できる。すなわちお寺では日本文化を五感で体験することができるのである。

そして、最も大切なことは、お釈迦さんに始まり、その弟子や高僧たちが千年も前から語りつないできた思想を学ぶことができるということである。

龍岸寺の本尊は阿弥陀如来である。阿弥陀如来の語源は「アミターユス」「アミダーバ」すなわち無

限の命を持つもの、または無限の光を持つものといわれている。無限の命を持つというのは、墓地に眠っている自分のご先祖の命と今の自分の命、そしてこれから繋がっていくだろう自分の子孫の命が繋がっているということである。

また、涅槃経や法華経では悉有仏性、すべてのものに仏が宿る、すべてのものが仏であるということが語られている。一見、不平等に見える社会の中で、深い悩みに溺れている人がいるかもしれないが、尊いお経の中では、人間も動物も、無情のものもすべて平等で同じである。今、たまたま、お金を多く持つ裕福そうに見える人も、やがてはそうでなくなるかもしれないし、実際には幸せではないかもしれない。

池口氏は、少しでも多くの人に気軽に佛寺に来てもらい、日本文化とともに、仏教の教えなどにも触れてもらいたい。そのように促すのが僧侶の勤めである。

お寺文化に親しんでもらう活動の一つとして浄土系アイドル「てら＊ぱるむす」があるのだ。

(四) てら＊ぱるむすの活動

池口氏は、第一章(一)で紹介した『フリースタイルな僧侶たち』を発刊する中で、メディアに報道され、世の中の注目を浴びることも僧侶としての一つの仕事であるとの認識で活動が続けてきたが、平成二八年(二〇一六)に始まったお寺での浄土系アイドル「てら＊ぱるむす」の取り組みは、かなりの

衝撃を世の中に与えた。

池口氏はこの取り組みを共著書「アイドルとともに歩む―ナムイ世界をつくらう」^(五)の中で「はたしてこれは、宗教をおもちゃにしたような通俗的なお遊びなのか、はたまた、宗教をつきつめていく方便なのか」と世間の評価が二分したと告白している。

龍岸寺では、平成二七年(二〇一五)から十夜祭、平成三〇年(二〇一八)から超十夜祭という念仏体験を取り入れたアートフェスが行われている。「十夜」とは、天台宗や浄土宗、時宗など念仏を重視する教団が開催する宗教行事であるが、龍岸寺およびいくつかの寺院でそれを現代に生かしたかたちでイベント化したものが「十夜祭」である。実質の企画運営は、美術系大学の学生が集まって担ってきた。

その十夜祭の企画を考える中で「お寺でアイドル」という発想が出てきた。池口氏は抵抗無く学生の提案を受け入れた。

そして、平成二八年(二〇一六)十一月に五つの寺院で行われた十夜祭の龍岸寺会場の主要企画として、五人の浄土系アイドル「てら＊ぱるむす」が結成された。「衆生(ファン)と共に修行する」をコンセプトに、衣装や踊り、歌の歌詞などに仏教的要素を入れて、あまり寺院に関心を持たない人たちに向かってお寺文化を発信するという活動が始まった。

アイドル名となっている「てら」とは寺(テラ)と terra(テラ)＝一兆という単位と、「ぱるむす」すなわち palms＝手のひらの複数形がかかっている。地球全体に存在する無数の生命体に対して、お寺に

広がる無数の手のひらが手を取り合って合掌し、理想の世界をつくっていくという深い理念につながっている。

メンバーは発足当時から入れ替わりがあり、現在は観音菩薩の化身である「観咲千世^{みさきちよ}」、勢至菩薩の化身「勢崎至恩^{せざきしおん}」、地藏菩薩の化身「笈地くらら^{あじくらら}」、月光菩薩の化身「月影サヲ^{つきかげ}」、日光菩薩の化身「日向慧満^{ひなたえみ}」の五名が正式なメンバーとなっている。

浄土系アイドル「てら＊ぱるむす」は、十夜祭や超十夜祭などの仏教行事や、他のアイドルグループとともにライブ活動、そして単独ライブの開催などを中心に活動が続けている。

その上で注目したいのは、ライブ以外の活動である。仏教を身近に感じることができる双六遊びや、本堂に集まった人々と新しい音頭をつくってみんなで踊ることなど、常に仏教の教えや文化をもとにしたイベントが検討されている。

(五) お地藏さん巡りのフィールドワークイベント

令和元(二〇一九)年十一月十七日(日)に宗教民俗学を研究しているということで筆者が特別講師となり「お寺の周りでお地藏さんみつけた」という地藏巡りのワークショップが開催された。「てら＊ぱるむす」のメンバーとスタッフが一緒になって企画したイベントであるが、ライブを伴わないイベントとして、また、お寺を出てのフィールドワークという珍しい試みであった。

参加者は、十一名^(六)で「てら＊ぱるむす」のファ

ンの方々がほとんどであった。内容は、龍岸寺の付近にあるお地蔵さんの祠を三班に分かれグループで探し、地図に落とし込んでいくというものである。最終的には、本堂に戻り大きな地図にみんなでその場所を記入し、各祠の特徴や、出会った人との会話などを報告し合うという流れである。もちろん、筆者は宗教民俗学の視点で、京都を中心とした民間信仰である地蔵信仰についての話も所々に入れてさせていただいた。

今回参加された「てら＊ぱるむす」のファンの方々は、①基本的に身近な存在としてのアイドルが好き。②仏教の次世代の活動に興味を持っている。③アイドルもお寺の雰囲気も気に入っている。という概ね三種類の嗜好を持った人たちに分けることができる。

当日収集したアンケートの感想欄には「フィールドワークも良かったが、講師の話ももっと聞きたかった」「普段気に留めていないお地蔵さんについて深く知ることができて良かった」「地蔵菩薩の地域密着の信仰や功德を学ぶことができて良かった」「本地仏の説明をもっと聞きたかった」など、地蔵信仰や仏教に関する興味関心についての記述が多く見られた。また、今後「てら＊ぱるむす」と関連して開催して欲しいイベントがあるかという問いに対して「花まつりに参加したい」「京都十二薬師巡礼をしてみたい」「比叡山延暦寺の散策」「お寺巡り」など、ほとんどの参加者がやはり仏教文化に触れるイベントの開催を望んでいた。ただ、忘れてはいけ

ないことは、仏教に触れることと同時に身近なアイドルとしての「てら＊ぱるむす」メンバーとフィールドワークを共にする喜びがあることは、参加した筆者も十分に理解できた。

このイベントは、SNSを同時時間帯に使用しながら、発信、拡散していただくこともあり、今後このようなフィールドワークに参加するファンが多くなる可能性は十分あると想像できる。

今後このような活動が、どのように展開していくのかは未知数であるが、「てら＊ぱるむす」をプロデュースする学生たちは、龍岸寺を舞台に普段お寺という空間から遠い存在である人々を、お寺に近づける機会をつくっていることに違いない。

(六) 池口住職の思い

池口氏は、寺院が古い慣習にとらわれない新しい取り組みに挑戦するとき大切なことは、「継続」であるという。大乘仏教の教えは浄土宗龍岸寺の檀家だけのものではない。寺院が何かを発信するときには、ぶれることなくしっかりとした方向性を持つて続けていかなければならない。「てら＊ぱるむす」の活動も、学生たちがやりたいという気持ちを大切にしながら、多様な価値観を持つ人々が寺院を体感するという環境をつくるために積極的に応援してきた。先述の通り、活動をはじめた頃は、檀家さんをはじめ様々な人々から賛否を聞いたが、現在では、マスメディアの発信や、龍岸寺が発刊する「龍岸寺ファン通信」によって、ある程度世間に知れ渡り、

檀家さんも受け入れてくれているという。

池口氏は、先祖から子孫へと無限につながる生命の大切さ、そして仏教思想を根底とした日本文化の素晴らしさなどを臨場感をもって多くの人びとに伝えたいという熱い思いがある。今後も、アイドルイベントの後方支援だけでなく、宗派を超えて、これまで以上に多彩な活動を重ね、寺院をより身近で、地域にとって必要な存在に近づけていこうと努力されている。



龍岸寺本堂で地蔵信仰について解説する筆者（撮影：三輪泰生）



てら＊ぱるむす単独ライブの様子（アートフェスタくさつ2019 草津市浄教寺にて）



龍岸寺境内にて解説する筆者（撮影：三輪泰生）



ワークショップ告知
（てら＊ぱるむす公式WEBサイトより）



地蔵の祠をマッピングする参加者
(撮影：三輪泰生)

第二章 滋賀県における寺院の活動の一事例

(一) 滋賀県の寺院事情

前項では、京都の龍岸寺を中心に、現代の新しい寺院の取り組みを紹介したが、滋賀県ではどのようなであろうかと調べてみた。京都は江戸時代には八百八寺と言われ、元々寺院が多い地域であり、各宗派の総本山である知恩院、東西本願寺、建仁寺、天龍寺、南禅寺、妙心寺、大徳寺などに加え、鹿苑寺、慈照寺、清水寺など多くの人々が参拝に訪れる寺院が集まっている。

一方で、滋賀県にも延暦寺や三井寺、石山寺など京都の観光寺院に匹敵する寺院もあるが、地域に根付いた小規模な寺院を各地域で見ることができると、滋賀県の寺院数(宗教団体数)は、令和元年度の文化庁宗教年鑑によると、三、二〇五カ寺で、人口十万人当たりの寺院数が約二三〇カ寺と全国一位である。全国の寺院数七六、九三〇カ寺で人口十万人当たりの寺院数が約六〇カ寺に比べると、その数の大きさがわかる。

しかし、この数字は、寺院運営から考えると重くのしかかる。言い換えると単純に一寺院あたりの檀信徒数が全国一少ないということが言えるのである。加えて、滋賀県には、草津市を筆頭に大津市、栗東市、守山市、野洲市、湖南市など京阪神の大都市周辺の衛星都市が多く存在し、新興住宅地に居住する住民は、一般的に古くから地域に根付く寺院の檀信徒となることはない。したがって、滋賀県内の一寺院あたりの檀信徒の数は全国規模で考えて、一層少ないということになる。

また、浄土真宗本願寺派が発行している「第九回宗勢基本調査報告書」によると、滋賀教区の寺院収入は、年収三〇〇万円未満の寺院の割合が八三・七%と全教区の中で最も少ない地域である。同報告書に、滋賀教区の寺院の所在地は、農山漁村が七一・〇%であり、全教区の中で六番目に高い結果となっている。これはあくまで浄土真宗本願寺派の寺院に限られるが、滋賀県内の寺院は、他府県に比べて、年収が少ない寺院が多く、その所在地も農山漁村の集落内に多く見られると言いうことができる。

しかし、一方で、寺院と檀信徒との繋がりの深さを見ると、これも同じく宗勢基本調査報告書によると、二〇年後に寺院を「護持できるか(大切に守っていくことができるか)」という問いに対して、「護持できる」と回答した滋賀教区の門徒(信徒)が三四・九%あり、全国平均の三五・八%に近い数値となっている。要するに、非常に寺院収入が低く、一カ

寺あたりの門徒(信徒)数が少ないにもかかわらず、寺院に対して守つていこうとする思いが強いことがうかがえる。

龍岸寺池口龍法氏を知る滋賀県内の浄土宗寺院を例に挙げると、非常に熱心な檀信徒の姿が見えてくる。その様子を次項で紹介してみたい。

(二) 寺院と檀信徒の繋がりを見る

例えば、甲賀市の浄福寺(檀家数四一軒)と東近江市の圓光寺(檀家数三五軒)の二カ寺が、檀信徒の力(長年にわたる積み立て)で本堂の建て替えを行ったという事例である。いずれの寺院も、「お寺とは、自分たちの先祖が大切に守ってきたものであり、それらをこの時代に終わらせることはできない。」「かつてお寺は住民の生活の中にあつたが、それが薄れてきている。再建を機にもっとお寺を生活に近づけたい。」「お寺は心が落ち着き、阿弥陀様やみんなと出会える大切な場所。本堂を新しくして、今後四〇〇年、五〇〇年と地域の中心であつてほしい。」などの声に代表されるように、巨額な再建費用による負担があつたにもかかわらず檀信徒の厚い信仰心によって本堂の再建が行われたのである。

これらの地域では、おそらく様々な新しい地域の取り組みが生まれてくるはずである。

滋賀県の寺院の現状を考える時、一寺院あたりの檀信徒の数が少ないが、熱心な檀信徒の存在が見られた。しかし、新興住宅地が多いという中で、そこに暮らす人々の寺院との関係はあまり見ることがで

きない。少子化や地方の人口減少などから、高齢者の一人暮らしや子どもの教育の問題など、地域には様々な問題が山積している。

滋賀県においては、このような新興住宅地の住民を巻き込んだ寺院の取り組みの必要性なども考えなければならぬ。そういう意味でも、次項の東近江市正福寺の「サラナ親子教室」という取り組みは、将来社会の寺院の役割の一つの姿を提案しているように思うのである。

(三) 正福寺の取り組み「サラナ親子教室」

東近江市五個荘伊野部集落に浄土宗箕作山正福寺がある。この寺院で十八年間、子育て支援活動を積極的に行っている住職がいる。^{せきしょうけん}関正見氏である。関氏は、奈良県の浄土宗寺院の出身だが縁あって、二七歳の時にここ伊野部に入った。

伊野部集落は、四〇数軒の小さな集落で、すべての住民が正福寺の檀徒であり、同時に地域内にある建部神社の氏子であり、伊野部自治会の会員であるという非常にわかりやすくコンパクトなコミュニティが形成されている。

関氏は、この寺院で、平成十五年（二〇〇三）から住職夫人菊世氏とともに「サラナ親子教室」という子育て支援を開始した。地域の同世代の人々とともに自身の子育てができ、同時にお寺という空間が交流の場となればという思いがきっかけであったとのこと。

活動の内容は様々で、十時ごろから挨拶や歌やお

経、法話などのセレモニーの後、その日のテーマに合わせて、水遊びや、芋掘り、団子づくり、子育て悩み相談などが行われ、みなでお昼ご飯を食べて終了となる（ちなみに会費は一日五〇〇円・お昼ご飯代とのこと）。

参加者（親子で参加が原則）は徐々に増え、一歳児クラス、二歳児クラス、三歳児クラスに分かれてそれぞれ月二回が平均の実施回数である。現在、毎月約六〇組が参加している。また、参加者の居住地は、開始当初は伊野部集落の檀徒の親子であったが、徐々に活動の情報が広まり、周辺の八日市や近江八幡の新興住宅地に居住する親子も増えてきた。

(四) 「サラナ親子教室」の取り組みから見えてくるもの

現在、厚生労働省によると地域の子育て支援の拠点は全国で四〇〇〇ヶ所以上にのぼり、目的としては、急速に進む核家族化による子育て家庭の孤立を防ぐため、親子が気兼ねなく集い、つながりを持つて子育てを共に考える機会を増やすことがあげられる。

しかしながら、運営母体は市町村の直営から社会福祉法人、NPO法人への委託など様々であり、担当者の能力や実践方法によって得られる成果が一定ではないなど、問題を抱えているのが現状である。

そのような中で、寺院で取り組む子育て支援には様々な可能性が秘められているように思う。本来、仏教が悠久の時間を経て受け継いできた思想の中に

は、子育てや人々の繋がりをつくるための知恵が語られている。

また、第一章（二）で、池口龍法氏も語っていたように、寺院は日本の歴史や文化が詰まっている空間である。子ども達もそうであるが特に若い母親たちにとって、長期間、活動を続ける中で、自然なかたちで日本人としてのアイデンティティを育む機会となっている。寺院で行う子育て支援は、公民館や図書館、福祉センターなどの空間とはまた違った成果を期待できるのである。



「サラナ親子教室」のようす (1)



正福寺がある伊野部集落の様子



「サラナ親子教室」のようす (2)



東近江市五個荘伊野部の正福寺

第三章 将来社会の寺院のあり方

(一) サラナ親子教室の将来

関氏が、ここ正福寺で始めた「サラナ親子教室」とは、浄土宗総本山知恩院で生まれた、本山と末寺、そして檀信徒の繋がりを再構築しようとする活動の一環である。社会の変化によって、核家族化が進行し、先祖や親族との繋がりがや信仰心の希薄化を食い止めようとしたのである。そのような背景の中で平成十年（一九九八）に「サラナ親子教室」はスタートした。「サラナ」とは古代インドパーリ語で「安らぎの場」「心のよりどころ」という意味がある。

関氏は、現在、正福寺の実績を認められ、親子教室の担い手を育成するサラナ親子教室事業推進の主幹の役割も担っている。結果として、現在、全国二一ヶ所の浄土宗寺院で、教室が運営されているが、関氏はまだまだ少ないと実感している。正福寺では、この教室を続ける中で、お寺が地域の中で開かれた存在になりつつある。関氏は、約四十数戸の地域住民の顔と名前が一致し、概ね家族構成もわかっているという。最近では、集落の人口も少し戻ってきた。これまでは、所帯を持つと他地域に移っていったが、敷地内に家を建てて三世代で住む家族が出てきた。これは、子育ての環境を含めた集落の住民の行き届いた配慮を土台とする居心地の良さがあるのではないかと。

集落の共有財産である裏山の里山復活運動や、田畑を使うことなど自然との共生を実現できる暮らし

のあり方が見直されていることも考えられる。

日本全体の人口減少は、地方により大きな打撃を与える。地方で暮らすことの良さ、価値観の転換が必要であることは間違いない。地方の寺院が中心となり様々な取り組みを行うことが、大きな社会問題を解決する一つの手段であることは間違いない。

今回、関氏を取材して、地方の寺院が、その地域のよりどころとなるような、檀信徒と共に寺院が行う取り組みがより広がっていくことが望まれる。そのためにも、五個荘伊野部集落をより良い地域にすることに継続して取り組んでいきたいという強い意志を感じた。

(二) 「ソーシャル・キャピタル（社会関係資本）」

という視点

今回の論考では、寺院の事例のみとなってしまうが、「将来社会の社寺の役割とは何か。」として神社も含めて考えてみたい。

滋賀県内の寺院が小さな集落内に少ない檀信徒を抱えながら現代社会に息づいている姿を見ると、近世のムラ社会の姿と重なってくる。近世の寺院の役割は、言うまでもなく大変重要であった。寺請制度によって、ムラ人として集落の一員となるためには、集落内の寺院の宗門改帳に名前が記載され、寺請証文を受け取らなければならなかった。要するにこれが今で言う戸籍であり住民票であって、それらを受け付け発行する権限を持っていたのが集落の寺院であった^①。

寺院にいる住職は、識字率が低いムラ社会にあって文字が読め、書けた。同じ宗派の住職との連携も、多少はあったから、ムラ以外の情報も入ったであろう。そして、子ども達に文字や道徳を教授し、宗派の法要や宗教行事に合わせて飲食の振る舞いがあり、地方からやってくる芸能者の芸能を披露することもあったであろう。

住職は、檀信徒の悩み事、相談事に耳を傾け、本尊に対する信仰や地蔵講、観音講などの講というコミュニティを形成し、寺院の敷地内は様々な形で心の拠り所となっていた。また、寺院は、宗教的アジールのような空間であり、ムラを領有する領主や代官などのムラ以外の大きな組織の圧力から逃れることができる自由な場であったとも言える。

当時の寺院は、市役所の支所機能、子どもの教育、生涯学習、心のケア、芸能などの楽しみ、何事にとらわれない考え方を持つこともできる自由な所であった。現代のコンビニエンスストアに対して比べ物にならない大切な場所であったのである。

一方、現代では、地方の市町村内にある小学校区を単位とした自治会組織の課題を整理してみると、人口減少と少子高齢化という大前提の課題から派生する、孤独な核家族世帯、高齢者の単身世帯などの増加、そこに子どもの教育、心のケアなどの福祉問題、地域経済の疲弊による地域の全体の寂寥感などが見えてくる。

このような課題の検証を目的として昨今では社寺というものが持つ「ソーシャル・キャピタル（社会

関係資本」の分析が行なわれている。

ここで言う「ソーシャル・キャピタル（社会関係資本）」とは、人と人が繋ぐ人間関係から生まれる心の豊かさなどを指す地域社会になくてはならないソフト面の資本のことである。

アメリカの政治学者ロバート帕特ナムは「ソーシャル・キャピタル」の三つの要素として信頼（自発的な協力を生み出し、自発的な協力が信頼を増幅させる）・規範（相互依存的な利益交換から生まれる互酬性の規範）・ネットワーク（協力をもとにした個人や集団のつながり）とし、アメリカの地域における共同体の衰退についての論文でその重要性を訴えた。

寺院においては、一つの地域の住職と檀信徒の信頼と規範というつながりをもとにしながら、他の地域にネットワークを広げていくことが求められるとの研究報告もされている。^(一)

今回取材した京都市龍岸寺と東近江市正福寺。どちらの寺院も信頼・規範・ネットワークを備えた「ソーシャル・キャピタル（社会関係資本）」という大切な資本を持って活動し、具体的に一つずつ検証したわけではないが少なくともそれによって幾つかの社会課題が解決されていた。そして、この二つの寺院以外にも、多彩な活動をしている多くの寺院の存在も知った。

寺院という空間には、宗派を超えて様々な文化や思想が詰まっている。一言ではもちろん、何日かかってもそれを全て説明することはできない。複雑で難

しいから敬遠されてしまうとも言われるが、逆に考えれば無限の可能性を秘めている。特に人口減少、少子高齢社会においては、生命の考え方や、癒しなど、心のケアが語られるようになることが想像される。そのような事象を寺院が受け止めていく必要もある。

この項の冒頭でも述べたが、今回は、寺院の事例にかぎってしまったが、筆者は過去の論考の中で、神社の新しい取り組みを紹介している。^(二) 今後、地域に暮らす我々は社寺という貴重な存在を意識して、何かきっかけをつくって、門や鳥居をくぐってみる必要がある。

謝辞

最後になりましたが、今回お忙しい中、取材にご協力いただいた龍岸寺住職池口龍法様、正福寺の住職関正見様、「てら＊ぱるむす」のプロデュースを手がける成安造形大学地域実践領域二年生三輪泰生さんにこの紙面をお借りして厚く御礼申しあげます。

参考文献

- ・大谷栄一編『ともに生きる仏教 ―お寺の社会活動最前線』（筑摩書房 二〇一九年）
- ・桜井邦彦『人口減少寺院の底力』（興山社 二〇一八年）
- ・櫻井義秀『人口減少時代の宗教文化論』（北海道大学出版会 二〇一七年）

注釈

- ・相澤秀生、川又俊則編著『岐路に立つ仏教寺院』（法蔵館 二〇一九年）
- ・櫻井義秀、川又俊則編『人口減少社会と寺院 ソーシャルキャピタルの視座から』（法蔵館 二〇一六年）
- ・広井良典『人口減少社会のデザイン』（東洋経済 二〇一九年）
- (一) 令和元年度『宗教年鑑』による平成三〇年一二月三十一日現在の数値
- (二) (一社) 日本フランチチャイブチェーン協会の令和元年十一月発表の数値
- (三) 令和元年度『宗教年鑑』による平成三〇年一二月三十一日現在の数値
- (四) 浄土宗龍岸寺・京都市下京区塩小路通大宮東八条坊門町五六四番地
- (五) 大谷栄一編『ともに生きる仏教―お寺の社会活動最前線』（筑摩書房 二〇一九年）
- (六) 参加者は全員男性。年齢層は三〇代から五〇代程度まで幅広い。熱心な仏教の信徒もおられた。
- (七) 総務省が二〇一九年七月に発表した住民基本台帳に基づく人口動態調査で、滋賀県の二〇一九年一月一日現在の人口は、外国人住民の増加に伴って前年より四四五人（〇・〇三％）増え、一四二万八〇人（日本人住民一三九万八〇六人、外国人住民二万九二七四人）だった。日本人は二二八二人（〇・一六％）減ったが、外国人が二七二七人（二・〇二七％）増えて二年ぶりの増加となった。年齢区分別では、年少人口（〇～十四歳）の割合が全国二位の十四・一三％、生産年齢人口（十五～六十四歳）も九番目に高い六〇・四五％で、他府県と比べて年齢構成が若い傾向が続いている
- (八) 櫻井義秀、川又俊則編『人口減少社会と寺院 ソーシャル

ルキヤピタルの視座から』(法蔵館 二〇一六年)「第四章 信頼は醸成されるか ―浄土真宗本願寺派 那須公昭著」を参照

(九) 総本山知恩院公式Webサイト内 華頂特集記事 本堂再建―檀信徒の決意―参照

(十) 明治時代になると、これまでの寺請制度が廃止され、政府の方針によって、郷社とされる神社の氏子となることが義務づけられた。

(十一) 櫻井義秀、川又俊則編『人口減少社会と寺院 ソーシャルキヤピタルの視座から』(法蔵館 二〇一六年)「第四章 信頼は醸成されるか ―浄土真宗本願寺派 那須公昭著」を参照

(十二) 加藤賢治著「寄人衆の役割に見る五箇祭の多様なコミュニティが結び、支える祭礼の一事例」成安造形大学附属近江学研究紀要6号(二〇一七)

加藤賢治著「近江の〴〵サンヤレから見えてくるもの―大津市真野の〴〵サンヤレ祭り―と栗東市大宝神社の〴〵サンヤレ踊り―を例に―」(二〇一八)

編集後記

本紀要では本学研究員からの論考2編と、近江学研究所主催の公開講座・近江学フォーラム会員限定講座の報告1編を掲載します。

加藤研究員の論考は、少子高齢化などの現代的課題を抱える中で近年地域の核として活発に活動している2つの寺院の取り組みを紹介し、将来社会における杜寺の可能性を考察しています。石川研究員は、近江の4つの地域をめぐって出会った独特な魅力を掘り下げて「近江の懐をめぐる3」というかたちで紹介しています。「講座の報告」では、平成31・令和元(2019)年度に開講した158回、168回までの講座概要を報告しています。

本号発行予定の3月現在、新型コロナウイルスの流行のニュースが連日報道されています。非日常的な事態によって社会の基盤がゆらぎ不安が広がる中で、人々の心をつなぎ支えるものについて考えさせられます。本研究所では、近江に内在する普遍的な美やかけがえのない価値などにつながるような研究を今後も積み重ねてまいります。よろしく願います。

編集担当 永江弘之

成安造形大学附属近江学研究所 紀要 第9号

発行日 令和2年3月18日

発行 学校法人京都成安学園 成安造形大学

附属近江学研究所

〒520-0248

滋賀県大津市仰木の里東4-3-1

電話 077-574-2118

発行者 西久松吉雄

編集 成安造形大学附属近江学研究所

印刷所 株式会社北斗プリント社